

桜の花びらが視界に入ってきて、ふと顔を上げた。とたんに春には不似合いな強さの日差しがまともに目に入ってきて、思わず顔をしかめてしまう。

そろそろ昼時になる公園は、遅咲きの桜の花びらとそれを見に来たそこそこの数の観光客でまだらに染まっている。混むだろうと気持ち早めに来たはいいものの、この暑さだ。僕は早々に写真を撮るのにも飽きてベンチからぼんやりとカメラの写真フォルダを眺めていたのだった。もちろん一人で来た訳ではなくて、連れ添いのメンバーも何人かはあるのだが、何かそれぞれに思う所でもあったのか、思い思いの場所で過ごしている。

Aから連絡があったのはGW一週間前。行楽シーズンにも関わらず、「そうだ京都市行こう」並みの気軽さで旅行の誘いをかけてきたのだ。「予定は確かに空いてるけど……?」「ノーとは言っていないよな?」じゃあ朝六時に〇〇駅で待ち合わせな、よろしく!」どんなネットワークを使ったのか知らないが、現地で会ったのはちよつとした同窓会にしか見えない面子だった。僕、A、B、Cの計四人。A以外は高校以来丸一年は会っていないから尚更だ。それもそれなりに因縁のある関係で、集まった時にはA以外の全員がなんとも言えない空気になった。

だからまあ、目的地に着いてもこうして自然とほほ個人行動になっているのはお互いの気まずさのせいなんだと思う。なんとか最後まででもみんなで回ろうと健気にも奮闘するAを尻目に、公園の桜に視線を戻す。

辺りには見事な桜並木が立ち並んでいた。地球温暖化も手伝ってか、北の方とはいえそろそろ散り始めの時期に突入しつつあるらしい。が、そんなことは気にならない位に桜の花びらたちは春を高らかに謳っていた。寒そうというイメージだけでなんとなくバッグに詰め込んで

きた上着も、この様子だとこの暑さにはただの荷物にしかならなかつたみたいだ。

抱え込んだバッグの重さから気をそらすつもりでも、もう一度カメラに目を戻す。ずいぶん久しぶりに手入れしたせいか、まだ微妙に黴臭い。なんとはなしに表面の埃を指でなぞってみる。そうして今回撮った写真を振り返ることにしたのだけれど……。「ダメだなあ……」思わず自分に自分でダメ出しをしてしまう。自分としてはリハビリのつもりで撮ったものとはいえ、こうして見ると腕が鈍りに鈍っているのがわかる。あれもダメ、これもダメ、とフォルダを流し見する。

「あの……」聞き慣れない声に思考がしばし停止する。ややあつて声を絞り出した。

「どうしたの? C……さん」Cさん。少し話したことがある。ダントツに気まずい相手。その子が写真の時のように少し気まずい顔をして話しかけてきていた。

「あつちでAくんが、そろそろご飯にしようって」

「……わかった。ありがとう」ぎこちない会話。ベンチから立ち、お互い無言のまま手を振るAたちのもとに人混みを避けつつ歩いていく。何を話せばいいのかわからないなりに、ひとつ話題を振ってみた。

「……いい天気だね」

「うん。……あの」

「?」

「どうして、Dくんは来てくれたの?」

それは。「なんとなく、かな」なんとなく、来なきやいけない気がしたから。

「よかった」

「え」

「とにかく、よかった。だって」なんだか不穏な言葉

が続きそう、慌てて声をかける。

「あの。Cさんはなんでここに？」

「……私も、なんとなくかも」曖昧に濁された気がしなくもない。あるいはなんとなく、来なきゃいけない気がしたから。彼女もそうだったのだろうか。だとしたらきつと、その考えは間違いないやなかったのかもかもしれない。

「お、きたきた」

「昼ごはん買ってきたよー。Cちゃんと、Dくんはこれでもいいんだよね」Bから昼食を受け取りつつそれぞれで適当な場所に腰掛ける。Aが話しかけてきた。「変わらないよな。Dは写真撮る時は昔からコレ、だろ？」

「よく分かってるね。コレ、だよ」実は食べられるようになったのは結構最近なのだが、まあそれは言わぬが花というやつ。

隣ではBとCが話している。

「Cちゃんは本当に私と同じで良かったの？」

「うん。Bさんが前に美味しいって言ってたから私も気になって」「ホント!? 嬉しい!」おや、と思った。

この二人に友人関係があった記憶はあんまりない。それを汲んでかAが小声で答えてくれた。「高校に入ってから仲良くし出したらしいぜ。俺も詳しくは知らないんだけどさ」ふーん、と生返事をしてしばし考える。来なきゃと感じた理由は、きつと一步を踏み出すためだ。あの日から一步を踏み出すための、勇気を出さなくちゃいけない。だから……手始めにAをイジめることにした。

「オイちよつとまで」その後も話は弾み、B、Cとも無事に打ち解けることが出来て、心なしか初めにあったそれぞれの壁がなくなった気がした。

と、場が十分に温まったのを確認したのか、Aが妙に真剣な顔で提案してきた。「なあ。写真、撮って……もら

わないか？」自然、皆の視線が僕に集まる。答えはもちろんイエス。写真を通行人の方にお願ひしてまず一枚。

それからありがとうございました、と言って散らばる皆を引き止めてお願ひをした。「僕にも撮らせてくれないかな？」固まる三人。すかさずもう一押し。

「なんかいい画だな、つて」

「……いいんじゃない？」

「いいと思う」

「そうだね」

了解を得て、フアインダーを覗き込む。友人たちは、控えめな笑顔であったり、優しく微笑んでいたり、能天気そうな顔だったり、思ひ思ひの表情を浮かべている。はつきり言つて、桜なんかより今日一番に綺麗な光景だなと思つた。ぎこちないカウントをかけて、シャッターを切る。不思議と懐かしい手ごたえを感じた。

「みんな、ありがとう」

それから公園の中を皆で回つた後、少し休憩を挟んで帰る事にした。午前と同じベンチに皆で腰掛けて、今日の写真を眺める。見せるには個人的にはちよつと恥ずかしい写真を経て、一番新しい写真が目鮮烈に飛び込んできた。この桜をバックに、思ひ思ひの表情で三人が写つている。闇雲に撮り溜めた今日の写真の中で、これだけは昔のように撮れている気がした。やっぱり今日一番に、綺麗だと思つた。

おもむろにCが口を開く。「Dくんは今日、どうだった？」

「なんというか、思つたより普通だったかな？ もちろん、良い意味で」浮かんできた感想をそのまま口にしてみた。

「どういふことだよ？ まあなんとなく分かるけど」

「でもAに理解されるのはなんか癪にさわるな」

「あ、その気分ちよつと分かるかも」

おつとBさん辛辣。

「わつはっは」

軽口を叩き合いながら、改めて撮り溜めた写真を眺める。今日だけじゃない。始めた頃からの分も含めて。キャンプ。運動会。修学旅行。いっぱいのカメラマンを気取つてた頃の写真だ。これブレてる、とかいやいやよく撮れてるよなんて言い合いながら皆で写真を眺めた。ひとしきり談笑した後、気がつけば日も傾いて、公園内の人もまばらになってきていた。

「少しバス停の時間確認して来るから待つて」とBが言う。「あ、じゃあ俺も俺も」成り行きでCと二人で待つことになった。「Bさんのこと、どう思う？」急に聞かれて何も答えられないまま思わずCの顔を見返すと、真剣な表情をしているのがわかつた。「実は今回の旅行を計画したのは、Bさんなんだ」

「……知らなかつた。てつきりAが無理やり組んだんだと」

「私が来ようつて思つたきつかけは、Bさんが作つてくれたんだ」「たぶんDくんも気づいてると思うけど、一年前のあのことを二人とも気にしてみたい。旅行に行く前にいろいろ二人と話したの」

「だからDくん、二人が帰つてきたらBさんとも話してあげて。あ、もちろんAくんもね」

何が「だから」なのかは、もう分かつている。今ならきつと大丈夫。そう思えた。「わかつた。約束するよ」そう言つと、ふつと二人の間の空気が緩んだのを感じた。

もう一度口を開こうとして、「すみません」Cが急に黙つてしまったので、とりあえず声の方へ向き直る。

「バス停の場所をお聞きしてもいいかな」見上げると初老の男性。「ええと、それでしたらここを真つ直ぐ行って……」道案内を終えて一息ついたあと、なぜだか無性に気になって男性の来た方向に目を向けてみる。桜並木の外れに立つ、不自然に鮮やかな桜に視線が流れた。あの日と同じ、混じりけのない薄紅色が目に見えぬ。……その鮮やかさがどうしようもなく気持ち悪くて、目が離せなくなる。

「うーっす、お待たせー。そろそろお開きしようぜ……あれ、どうした？」立ち尽くしたまま、△たちの声を背中で受け止めた。いや、とか、うん、とか曖昧に言葉を濁しながらも、視線はあの桜を捉えて離せない。少しの沈黙の後、何も言わずに手を引いてくれた○の気遣いがただ痛かった。

最初と同じ気まずい雰囲気のまま、足早にバス停に向かう。「お、なんかけつこう空いてるな」△が絞り出した言葉は空々しく響いた。人もまばらな車内をふらふらと進んで席に座る。席に着いたところで、何人かがバスに乗り込んだのを確認してドアが閉まった。何かを話す気にもなれず、荷物の詰まったカバンを抱えたまま椅子の背もたれに身を預けた。心地いいとはお世辞にも言えない気分のまま、眠りにどうにか逃げ込もうと瞼を閉じる。しばらくバスに揺られていると、おもむろに○が袖を強く引っ張ってきてまどろみから引き戻された。「今すぐ降りて」その顔は尋常じゃないほど強張っていて、なにごとか尋ねようとした瞬間。

ぱん。

一瞬遅れて、空気が凍りついた。「動くな。怪しい動きをしたらドライバーを撃つ」○が静かに息を呑む音が、妙に大きく聞こえた。運転席の

方に男が身を乗り出している。自分の位置から見えなくとも、男が何を突きつけているのかは想像に難くなかった。次の獲物を探そうとしたのか、こちらへと視線を向けてくる。品定めをするかのような男の視線から少しでも逃れようと無意識のうちに体をかがめていた。向こうの席ではAとBが顔を強張らせているのが見えた。

「おい」「後ろ二列目。通路側。立て」
僕だ。膝にカメラの固い感触が当たる。金縛りから弾かれるように腰を浮かせたその瞬間、男と目が合った。体はまったく動かないのに、記憶の蓋だけがぎりぎりそこじ開けられていく。あの日は卒業式で。彼は校舎裏にいて。彼？彼、は誰で。ぎりぎり。ぎりぎり、カメラのピントを合わせるように。「久しぶりだな」視界がにわかには薄紅を帯びる。赤の他人に向けるにはありえない、悪意のこびりついた形相。その憎悪に満ちた表情を見て確信した。

「来いよ」バスジャック犯、いや、「彼」の言葉に従う。△が行くな、と懇願するような視線を向けてきていた。一瞬だけ目を伏せた後、両手を上げてゆっくりと立つ。「久しぶりだな」静かに歩を進める。

「こんな所で会えるなんて、神は俺に味方してくれてるのかもな」ぱん。何が起こったのか理解する間もなのままに、足に激痛が走る。痛みで意識が飛ぶ中で、浮かんできたのはあの時の自分たちだった。

「あいつ気持ち悪いし、後輩たちもキモがってるからさ、クビにしない？」始まりは△の友人で、△はそれに悪乗りした形だった。実行役に選ばれたのは僕と△、それから○の三人で、○は周りの女子に囮役を押し付けられていた。そしてBはそのグループの一員で周囲を焚

き付けていたといったところだ。損な役回りだな、なんて△と愚痴を言い合いながらもズレた義憤に燃えていたのを覚えている。「あの用務員は変態だ」とか「女子をめっちゃ見てた」なんて、今思えば取るに足らない子供同士での噂に過ぎなかったのだろう。それでも僕らは気付こうとはしなかった。

今でも覚えている。ファインダー越しに見えた彼のポカンとした顔も、その後ろで一際鮮やかに咲いていた桜の木も。固まる○の手を引いて必死に走った。待ち合わせ場所には△が待っていて、僕はカメラを△に押し付けて、気がついたら家の前にいた。……その後、どういった経緯を経てあなただけのことは知らない。△から「あいつクビになったらいいぜ」と後ろめたそうな声とともにカメラを返された時を最後に、僕は何も聞いていない。そして、その日から△とはこの話を一切することはなかった。ただ、人は案外簡単に貶められるのだということを知って。高校入学をきっかけに、僕はカメラを辞めた。それだけの話。

それから一年。目の前にいるのは、見る影もない姿の異様な風体をした男だった。乱暴に蹴り飛ばされて、意識が引き戻される。不機嫌さを隠そうともしないまま、彼がふたたび運転手に銃口を向け直すのが見える。何かを思いついたらしい。どこから取り出したのか、もう一つの銃をこちらに滑らせてきた。動けない僕を前に、一方的に彼は捲し立てる。

「お前が選べ。自分を撃つたなら、他の奴は全員解放してやる。ああ、別に俺を撃つてもいいぞ、お前が社会的に死ぬだろうがな」
なぜ。

「目障りなんだよ。お前みたいな大した考えも責任も

持たずに、他人を嵌めて笑ってる自称第三者様が俺は一番嫌いだから死ね」

ああ、と息が漏れた。

これはきつと、報いなのかもしれない。罪悪感から逃れる、虫の良い言い訳を求めてしまったから。楽な道を選んで、好きなことをあんな風を利用してしまった自分自身が一番許せなかったのを、忘れてしまっていたから。バスのぐらぐらとした振動を足元に感じながら、ゆっくりと立ち上がる。

目に焼き付いたあの景色を思い出しながら、銃を両手で握って。

ファインダーを覗き込むように。

ゆっくりと、引き金を引いた。